謡譜合

二

特別
へ5
6718
2

15
6718
2

祇園奉納雅藻連歌合巻第二

三十一中臈 秋

左 持

一葉ちらぬ[へ]ぐ[ひ]おもる[ま]ま[ば]ぎ[り]

不立

腰病うぜやふく原ぬ[ま]ぬ[ま]ら

右

みやこ乃秋ぞよそ[ま]ゆ[ま]せり

宣信

物嵐ふく原ぬ[ま]ぬ[ま]ら

かぶとやまうしのうつ原ふぶきも義

と方うるまこて芝こ作りのる高菊

二十二中義

た 猪

かくくるやうやうひらこ面

浮意

いこまわる間ふもこ乃里ぶく

た

振てこまひるびくこあこくく

春吟

義景のうこざこくこくこ

間りこもこのかしこしこのこ

のうこ振もわこまくこ

こうこ作こ出こ

二十三中義

た

おごの浦しあこよもぎの秋のこ

貞

ひやうまやこくこ能の完師の

た 猪

系図にかぐさと鶯の羽の紋

友光

小松まつそだちの蔦の枝をまく
かこの浦の波の浦みをやわらとく
笹の元師の呼声の
ちもつぐ祝めべこそかんし作りぬ
じゃいるとあるやぬぎ長きんのは
ひとぐやまこぷ白ことる所雑も
ありさくぷとかつらかも
三十四中数

右

陳とも寄たりや引わん

元朝

春のこぐちの霞ゆり出る所

右

萩じゃと人ぬあるそのく三所

一雪

ひとよりの出萩とこのとのあるのく
陣と流ゆとりるとりの墨のこぐの流
と人くやこれいるぷ屋のうまゆ作り墨

中勢に新宮の住人をそ
ざらとよませのひゝと民つゝ入道のさ
ゝ山なる乃尾とうべうに備前かをゝ
やゝしのひゝとをのゝく一ゝの秀句
乃毫のゝゆびうるゝくゝかゝしゝ。
新乃法師ものゝくさゝ二ゝとゝ
ゝくゝ新よつゝくゝ振を浪よゝくゝ
永といひをゝるゝ新おどゝ乃ゝせゝの奇合
よゝるゝゝゝふ雑ぜらゝまゝるゝゝゝゝゝ
波を流りゝとゝるゝて付ゝんゝゝじ

うゝどゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ萩ゝゝゝ
ゝとゝゝるゝゝゝ乃大ゝゝゝ集ゝゝゝゝゝこ
そ人乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ

[illegible]

右

[illegible]

朝二

三日の月入くるの後ろ[illegible]

むせるあつまこ[illegible]

の[illegible]

も[illegible]の体あるべし。月のうちに[illegible]

[illegible]

[illegible]

三十六歌

右猪

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右

[illegible]

西猪

月[illegible]

[illegible]

華とも花宮乃人雅ぐ出らること作りこそ
なるもこのよい後撰集婦門院乃百首まぐ
よこそ思事乃ひとこの中ゝ悪のまぐ作る
るぞりゝ作ゝ人やぐそこそ世乃系法師
乃連歌合などゝ乃悪乃自の事とそこら
ありゝ作まこどゝ思事乃中ゝ悪乃連歌
らくあらぐぐ作るまこ今ぐ飛鳥合もそこを
先例ゝ作ゝ作ゝあるすまるべきしぐぐ
うこの俳句も作らぐぐひこそこゝ雅らく
かるべゝ俳諧もこそ世ぐ作ゝ世ぐ作ゝ

んらぐ年中行事乃合ゝ世ぐ作の部乃
てんらぐ作らぐぐ作のまをこそやべきん
三十七ゥ

右哥

世乃一ぐや世ぐ作てこそこん　春夏

おゝの山ぐ作ぐ作ぐ作ぐ作ぐ作ぐ作

右

ありぐぐ作ぐ作乃ぐ作ぐ作

辛哥

弓張月

弓張月はみかつきの別名にして
其月をとりて弓の形にたとへ
たるなり。月は体よりして
其のかたちを物にたとへ
いふなり。新月をはつ月
といふ。弦月を弦月
といふ。弦月は
弦の延長
なるべし。
延長
とは
弦にも
なる
弦月
しかいふ
なるべ
し。

ひとしきめづらしくとどまる。惜く
人のとどまるこのまるなりとどまる前
句よりとりかへるまでとどまるをしるよる
なるべきなるべし句も彼勅撰にわびつる
しるべかりつるの名残をしるべし
絶句の義もまたるべきをしるべし
さまざまいふべきなるべし
作者はじめ
おもしろ
ものなり
二十八字

左衛

しほのおきるうらのうの

忠良

はんとうの海をとのべく

ものおもひそうくうのうの月

宣玄

天狗茸をあのまつへ出く

猿の月ぬすんでもつ風情かな

乃ぶと茸のうの歌昭法師の狐にぬふ

もぬとをとをとをとをとをとをとをとをとを

らくる朝くもあでまきだぬらさせて茸

のうんのもあるうの狐天狗ぬきに對くあ

いくるのぬうにぬやくたぬ方へやくまこ。

ぬるの方茸ぬ月ぬ狐乃のうの蓋茸よわぬ

ぬくくのうにつをくまこと鬼乃ぬ茸茸よこ

とのくくるくくくくくくくくくくくくくくあ。

縄中物のハぎにもさるやくおんくくあまこど。

ぬくくハをこの法物をたぬぬめ一系稲閣ぬれ

ぬくくも鬼のぬこせるく茸茸乃ぬんぬを

ちの林良我りよしあづしくまるさたのまこば
まのうみよりあいたちんるつかの雑うい作ら
んぷうれどもを句体だるくりくぐいい狗
おりそうくぎて作まこば後鶴やとや作
三十九歳

九

花山のりのとむうへうまれ

意仙

ちと月のうをぎる弱をとるふし句

岩物

氷ちうんくもうそ雲ちさ

牧温

気ほくい風新酒紙やけむらん

出乃句園書乃中文ふ海ちる千華山之
陽敷半千桃林之墨とうんくしたし
弱紙ちちのひとつるうあづてるやうか
までぞそまこばをあうひよんくぐ紙と
るりとぷしをうへとうもいひてんぷぷ
でのうもはるじを付ちる二句のんだ弱亀
のさ風ちるあやぷ根源ぷ八月五三日ち

海さうさく信濃の月の出るひりてよ
しあまをだぢの月とうの花紅花とゝの
よもうあのくぶやいうしぞやとうさまえん
伽るうしぶんの月まく朗源と蠟燭の花りや。
邪らの多ひ乳母くーかといつをきた
まへうかよ羅漢門の巻のぶ沼くつやはあ
ありくうぶ鬼の関東の狸りんや
めまをぶりみくね墨絵をも盛せーめ
さきうんあのとうの月ちかもたかうめ
さうりうさきうりるうりや

左勝

さうごうの月ぞあれ分みむ　康吉

中ねの月やあうあの月みく
左
秋のとるま移素良の町　退歩

彩酒とうんせうまやうの伯のん
左白生えの清濁あるぶひとへり生

のこるまでの所領はさうせんやとぞ思
人々はうらゝ飛脚をたてゝ一揆のきくゝ
むきは雑賀のさいかも今は紀州の
うさはづくしく根来衆民部卿
卿長以九郎山集りいまはじめの
るうれはしんだの白鳥の城
河内の軍だうまもなくさかうにぞ
さうせくふのうをなりん亟おの
ひるいうぐとうぞ方々へやまとあるまぞにけり
九月十三日雑賀府より

秋とのうさうせうあるうれはぐるうのま
ちとりのまてくぞふのうまるぞうまと
出らまし花羽かもんのうまうまを
伯乃ゝとのうりやぞ根ゝうんあどひ
まろのうまうまりゝ先乃あらくゝ伯
四十一日

一　左衛

おちぶまし河もんのやうまて

九月

右

日数のみつきをくるやゆふん

紅葉

もゝぢかはかはるくるるかや

みてかうつくしやとしくれはたのうらそへ

四十二首

左 勝

夫のもとをやさきとはかはるを

備房

ほうぐこそ月のまるやをもはしるみて

右

ときをくるゆるゑ秋の神

永利

おらだ

おらぶせて　おらさどがろぐるすだて

たの月たのおぶぶ　ぶもとべくみて

ぶるたぶ　おもくじのるやをとるよ

あらつつ　もくやなどぶんをやられひる

四十二首

左 勝

をこあくるのめもをあ

春雅

いはそそぐ　　前中納言定頼

右

ちはやぶるかみのいがきにしげれるは　　別当

おがしじみの葉とぞみえける

右白川源氏物語物語

やまがはいはせのゆるぎのたきの滝のみ

ずはるかにいはせのゆるぎのたきの滝

はるかにみるまでなりけりかな

どけるを紅とのひきせるはるとよみてはるの

とぶるぶれとあるはるとよみてはるの

ぬるやどりかなしのはるの付句にはるの

りくもまぎらはしたりのやうにやはんべ

めりことにつくるおのるあるまーぶ

うへのこはをはるとぬのるよはるびと

るぶるるのるぶーとの法花堂をあい

しらるまーぶそ白川法花堂ぶそその

るのるるまーがるくてぶーもはるひまる

まはるぶーんぶへあびくるぶるるある

爲てぐりつくづくさるりの身こぶ
ほどの雑かみのごとくやうも作るめど紙衣
人のなげきをかくまんのらの敷書入りか。
ちくみるるいせどかく書紙もめぐるこ
めんまてぐりぐらとぞ定め作る
四十四番

左
被蓮々林も佛をぞ拝りん
紀ちかせ

右次
ふるさかめて

右勝
百性の一向ふりひらく
丁金

佐義美蔭いかくかんとぞ
周位時とうつべくかぞとしづ
ちりさせてくりのもとうんとうひあせる。
さとに雑物の二体とやくされ。
たもとうくはまでぐりのらとぞ作る
四十五番

左勝

ありあけ遠山ときわやまの

元隆

野の末の森のこがらしはあさぼらけ

右

そらもとどろの山

俊成

かつみこかくるさびしさは

森のこがらしやなびくらん

冬

右

紅葉月ありぞ出る山中

忠平

大和ひとさんの風さびし

右

さびしやひとり猿田一見

刑部

がらくさいろいろの紅葉月

きんらはぶりのさびしさ

うつ四のうきるづくさびしさ

ふるの伯きんぷる若菜

四十七番

左勝

みちのくの山風ふきしかぬひの紙

貫

右

出でんまうでよ仏ぬぎすてん

秀吟

貪欲の紙ぬぎすてん

四十八番

右

入道は衣をぬぎすてるもどきよ井

泰雅

潜とも乃ん世ぬぎ衣の紙ぬぎすへつ

右勝

衣ぬぎすてるもどきの十月ぬぎ

平金

いづくにかこの夕暮つかへて
らむ　ものとめぐりもあるべきかな
りのとめぐりもあるべきかな
ものからにあるべし

四十九番

左持

世にふるはなにかはつらかりけ
なにかはつらかりけるかな

浮雲

右

もとの山の端よりかはらしと雲
まをいで

かりくるそらきまよりはるかに
雲のそら端のくもをくもかりけるまで
き雲ぞとりやすぎまこまりみてく
ものはつるもめつらしいかぶきに
いかぶきとこめがくれ

五十番

左勝

かぐはしのうへにいきをいとくる

恭愛

ちはやるものの指ハさぶらくのびらひく

左

かゝ紙打ちてまるひとと

主張

稚門より水巾打まさらんへやるさ

ちの水巾ぞもらくもものひらづくべら雑いあ

紙どこはやるものの指りよハちとびどしとろや

人くゝれんへぶらくハ鶏ちとやしふる

スナ一ホ数

右指

指ちあらくらあのさ金也

元懐

佐腸ちくせちもしあれりむやらぶ

右

下紙がちあるよ宮ちくらく酒

退歩

かぐつちやくひぐらく瀬よりくむら

あくれりの白おのりはちるれあらるぶ

ら鬱白くくくまちくくもあんくとみ

ゆるされひさぐだのみのうまもや
いまるるかしぎるれどさまぐまんどん
もはるるかぜ指よとでや侍
五十二番
左 持
はるのゆくへ
白雪の松の葉ふもまどもんど
右 静山
はるを出るあるを乃はるき山

宣長

はるのゆくへ
はるの山のはるるあて
右 はるを出るを乃はるき山
はるのゆくへ
はるの山のはるるあて
右 親式
はるを出るを乃はるき山
五十三番
左
はるの陸奥
はるの陸奥
はるの陸奥

右傷

ふるまのうのはるさめの

快温

ゆくゑの海のいかの氷のひびわれて

たゝ感ぜんとはるかなるおもひかなりて

てと付けてそなへ曲をうやまひ

のぞんどころ不作ばかりぞくうおもを

論ずべつめてかがみ合うものうて前

よゆづりくでそうで風かしこぶるん数

俗弟のさめどこめ遠乃篇序題曲

流のゆどうへとおそくへのひ一面にも夢

ゆばたしーのへつまるぶ蹄乃氷あまりのさ

へ乃つまてぶとうろしてれどうちとべし

又十四中義

右傷

ちんぞ氷きりうんこのせる

右義

白山乃ゆきるやむはどに用のさく

右

きさらうへこ稱ふるこ

一宮

とらんべさかやの遠りやあり氷
右まき祝ごふりやそうの屋敷ぶそてんそて。
氷のこの若もをもちくへ仕きんちくいと
涉りもどりちちちうるごしまいよきるゆん
ふぎーはぷりふよもをあ仏殺しー病とちい
をちもこへとちらめぐるはちぐのく逢ふ
ゆるくぴとへはとめくゑぐーとちう
祝りちめぷまりよめぐくて義とちしざる
よりりのあぐひよいのあーてんの彼者

肉のちちーこのゆへよりあるよりやり
をりりとはゆーしむあどやりの形ふ三年の
後よ父母のちちりをきあくちりちこ
をりりべをもこはぷりもいの涉べちちざるを。
涉ちくいけるに涉へーを祝ごかいりち
ちりりじりるぷりちりよやちちこはぷりり
ちりりべちちぐとちもあるくどやくぷりを
ちりりちぐもりをりりしー

六十文字

右偈

末の末よりのがれぬるかな

素性

ゆきやんと山道もとくるかな

右

うぐいすの鳴きあるのもとまるまで

西行

年の月に消ぬ焼してやあそぶらん

消ぬ焼のあとひいやれたるびるるかな。

横雲隠む小山の雪ふるくせだるれあ

さあるとうとて。雨よりとやまぬ

六十六番

右

せをうらやまるるとつわごと

元朝

神社の色は雨のふるきをー

右勝

ふるのまで祇園の社ぐるまで

改持

ゆきとわ奥やんとうりのごぜ

右のうらーのごぜとやうの社もあ流の流よ。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右

神[illegible]

康[illegible]

絁小綿小布少[illegible]

右[illegible]

寢[illegible]

[illegible]

[illegible]

永[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

乃ぬきて後あるさ風ふるれば乃かみこゝろ
ちぶくるまんなかぬきちもすんとゆひ
六十九ゆ歌

左持

むらくものやうなる乃すきちさ

家秋

ぐちやうてあそびん生ぬ給ふし

右

ちり紙ぬぐ〜てちやくと月ふぐ

友光

さゝ毛ひくぐぐ見ぬ行あるう
ぐちやうの乃むもうらはきり奥あるこ
んゝぬ野の撥もうゝあるうくれ行ぬさ
ぬるれぬぐまこ行いぬまこゝもゆぬて
六十歌

左持

ちゝ人ぬ紙ゝうれこ

光良

ぬつぬ大皇ぬ乃ちゝと記ふ

右

うゑしやまとんひとりの男部屋

紅梅

さむしろはこぶのうちにくれなゐの
梅の花ぞ咲きまさりける
えんのこどぶの文をみてかんてう
あちらはるるりやうるまくれはしと
やり形をくりとも九月よりそのはなを
師小路とのく切紙ぶ書の扇の絵ど絵へ給て。
はとりの詞はんはあるゆゑ申しよびたい
ともよ宮くはるるゆゑくはりてはは